

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531177

研究課題名(和文) 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発

研究課題名(英文) Development of Social Studies Teaching Material Focusing on the History of Exchange in East Asia from the Perspective of International Understanding

研究代表者

高 吉嬉 (KO, KILHEE)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：20344781

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国際理解の視点に立って、中学校社会科教育における東アジア交流史の教材を開発することを目的としている。2012年から3年間にわたって、日中韓の6名のメンバーが集まって共同で教材開発を行い、その成果を『国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発』としてまとめた(HP: <http://www.juen.ac.jp/kaken/24531177/index.html>)。この研究の特徴は、これまでの国家史や政治史・経済史とは異なる、人々の交流史を中心とする歴史教材を通して、将来の東アジア地域の平和構築に資する社会科教育を目指している点にある。

研究成果の概要(英文)：This project from the perspective of international understanding aims to develop material designed to be useful for teaching social studies in middle school focusing on the history of exchange in East Asia. The six Japanese, Chinese and Korean project members studying together the history of exchange in East Asia in the last three years reported that it may be useful material for teaching social studies in middle school. The unique characteristic of this project is that it inspires study contributing to peace in East Asia, focusing on the history of exchange rather than that of the nation, politics and economics.

研究分野：社会科教育、国際理解教育

キーワード：社会科教育 歴史教育 国際理解 教材開発 東アジア 日中韓 交流史

1 . 研究開始当初の背景

これまで社会科学の分野においては、日中韓の共通教材は作成されているものの、国家史とりわけ政治史が中心である。日中韓は今後も隣国として、歴史的・政治・経済的・社会的にも友好的な関係を維持していく必要がある。そこで、国際理解の視点を活かし、特に人々の交流史に焦点を絞り、日中韓の社会科学教材開発を行う本研究を構想した。

2 . 研究の目的

本研究は、国際理解の視点を踏まえて、中学校社会科学教育における東アジア(日本・韓国・中国)交流史の教材を開発することを目的とする。国家史や政治史・経済史とは異なる、人々の交流を中心とする歴史教材を通して、将来の東アジア地域の平和構築に資する社会科学を目指す。

3 . 研究の方法

本研究は、研究代表者(高吉嬭)と研究分担者(國分麻里・梅野正信・金玟辰)を中心とし、連携協力者(蔡秋英)と研究補助者(二谷貞夫)という研究体制で、3年間にわたって、以下のような研究会および調査活動を通して、東アジア(日本・韓国・中国)交流史の教材を開発してきた。

年度	内容
2012	5月：第1回研究会の開催(山形県：山形大学) 6月～2013年1月：文献・現地調査 12月：第2回研究会の開催(東京都：筑波大学)
2013	7月：第3回研究会の開催(長野県：白樺湖) 10月：研究成果の発表(山形県：山形大学)
2014	5月：第4回研究会の開催(東京都：筑波大学・池袋) 6月～2015年1月：報告書のための原稿収集及び作成
2015	3月：報告書の刊行及び配布

4 . 研究成果

2012年度

「第1回目の研究会」開催(2012年6月16～17日、山形大学)：2年間に及ぶ研究方針を確認し、各自の役割を把握するなど、今後の研究計画を遂行する為の研究体制を構築した。

文献調査と国内の現地調査(2012年6月～2013年3月)：研究代表者の高と研究分担者が個別に実施し、メールなどで意見交換を行った。

「第2回目の研究会」開催(2012年12月22～23日、東京・筑波大学)：2012年の研究成果と学会発表を通して得られた課題を確認した上で、教材作成の具体的計画を行った。

高校での授業実践(2013年2月19日)：研究分担者の國分が17世紀頃から19世紀初までの日本と朝鮮半島の関係について、漂流民による交流を手がかりに授業を行った。

ホームページの作成(2013年3月)：研究分担者の梅野を中心にこの研究を発信するための、ホームページを作った。
<http://www.juen.ac.jp/kaken/24531177/index.html>

2013年度

第3回目研究会(2013年7月27～28日、長野県)：研究補助者である二谷が在住する白樺湖において、2013年の研究成果と学会発表を通して得られた課題を確認した。教材作成の具体的計画を行った。また教材研究のために「浅川伯教・巧兄弟資料館」「尖石縄文考古館」を見学した。

文献調査と現地調査：研究代表者(高)と研究分担者が個別に実施し、メールなどで意見交換を行った。

研究成果の発表(2013年10月)：学会(日本社会科学教育学会)での発表を通して、研究成果の発言を積極的に行った。研究分担者の國分が課題研究「アジアにおける社会的課題の共有と社会科学授業開発の可能性」において、「韓国における多文化的状況と社会科学教育 - 歴史教育を手がかりにして - 」を報告した。

メールなどを通して研究成果の交換を行いつつ、最終年度に研究成果をまとめて報告書を作成し、その内容をいつか出版することができるように原稿を集めながら検討し始めた。

2014年度

第4回目研究会(2014年5月10～11日、筑波大学茗荷谷キャンパスとマイスペースMS&BB池袋西武横店)：10日に各自の教材案を報告し検討を行い、11日には科研報告書作成の日程や役割などについて話し合った。

最終年度科研費報告書の原稿収集及び検討(2014年12～2015年2月)：メールなどを通して継続的に研究成果の交換を行いつつ、研究成果をまとめて最終年度科研費報告書を作成するため、メンバー全員の原稿を集めて検討した。

研究成果報告書の冊子づくりと普及(2015年3月)：研究代表の高・研究分担者の國分と金が報告書作成の中心となって研究成果報告書(『国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科学教材開発』、2015年3月)を完成し、100部の冊子を作り、郵便などを通してその成果を普及しはじめた。

HP体制づくりと研究成果普及の準備(2015年3月)：梅野を中心に、HP(<http://www.juen.ac.jp/kaken/24531177/index.html>)を通して、今回の報告書の研究成果を普及していくための体制を整えた。またメールなどを通してメンバー全員で、これまでの研究成果をさらに深めつつ、各自の研

研究成果を授業実践に活かし、普及していくことを確認した。

研究成果報告書『国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発』(2015年3月,全72頁)

<http://www.juen.ac.jp/kaken/24531177/index.html>, 参照。

<目次>

はしがき

研究の目的と概要

日韓の歴史博物館で学ぶ東アジアの同時代史(梅野正信)

「食」から見る東アジア交流史の教材開発 - 昆布と唐辛子を例に - (金玟辰)

朝鮮時代・江戸時代の漂流民に関する授業実践(國分麻里)

二人の「巧」と韓国 - 浅川巧と藤本巧を通じた日韓相互理解のための序説 - (高吉嬭)

食文化から考える東アジア文化 - 日中韓の箸食文化を中心に - (蔡秋英)

古典落語から東アジアの庶民生活を読む(二谷貞夫)

閑話休題 - あとがきにかえて -

執筆者一覧

以上のように、本研究では、社会科教育の中心に国際理解の視点を据え、東アジアを中心に歴史分野の共通の教材案を構築するという作業を行ってきた。このように、日本と韓国・中国の社会科教育、特に歴史教育を担う日中韓の者たちが共同で研究を行うことは、教育活動を通じた東アジアの共生に向けての一つの取り組みとして評価される。そして、これが本研究の学術的な特色、独創的な点と言うことができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

高吉嬭, 二人の「巧」と韓国 - 浅川巧と藤本巧を通じた日韓相互理解のための序説 - , 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発, 査読なし, 2015, 32-46。

梅野正信, 日本統治下中等学校の校友会雑誌にみるアジア認識 - 研究方法を中心に - , 上越教育大学研究紀要, 査読なし, 2015, 53-65。

梅野正信, 日韓の歴史博物館で学ぶ東アジアの同時代史, 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発, 査読なし, 2015, 1-9。

國分麻里, 朝鮮時代・江戸時代の漂流民に関する授業実践, 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発, 査読なし, 2015, 21-31。

金玟辰, 「食」から見る東アジア交流史の

教材開発 - 昆布と唐辛子を例に - , 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発, 査読なし, 2015, 10-20。

二谷貞夫, 古典落語から東アジアの庶民生活を読む, 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発, 査読なし, 2015, 59-69。

蔡秋英, 食文化から考える東アジア文化 - 日中韓の箸食文化を中心に - , 国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発, 査読なし, 2015, 47-58。

高吉嬭, 二人の「巧」と韓国, 韓国日本近代学会第 30 回国際学術大会論文集, 査読なし, 第 30 巻, 2015, 190-197。

金玟辰, 国際理解教育の観点からみる社会科における韓国関連内容の変化: 1980 年代以降の教育 - 教育出版小学校教科書を手がかりに - , 北海道教育大学紀要(教育科学編), 査読なし, 65 巻 1 号, 2014, 245-255。

國分麻里, 『国民史』を超える試み - 歴史教科書の改善および共通教材の作成に関する研究動向 - , 筑波教育学研究, 査読なし, 12 号, 2014, 55-73。

〔学会発表〕(計 5 件)

高吉嬭, 二人の「巧」と韓国, 韓国日本近代学会第 30 回国際学術大会, 鹿児島国際大学, 2014.11.1。

國分麻里, 韓国の学校 100 年史における植民地期朝鮮の教育 - 内容の分析を中心に - , アジア教育学会第 9 回大会自由研究報告, 埼玉工業大学, 2014.11.1。

高吉嬭, 招聘講演, 韓国内における日本軍「慰安婦」をめぐる動向, AALA 山形支部, 山形大学・人文学部, 2014.10.26。

梅野正信, 日本統治下における中等学校(師範学校を含む)校友会雑誌研究の意義と課題, 教育史学会, 日本大学, 2014.10.5。

梅野正信, 日本統治下中等諸学校校友会雑誌・生徒記載文にみるアジア観の変容, 教育社会学会, 松山大学, 2014.9.14。

〔図書〕(計 6 件)

二谷貞夫, 比較史・比較歴史教育研究会『東アジア歴史教育シンポジウム』1980 年代の日本と中国の歴史教育者交流のはじまり, 比較史・比較歴史教育研究会編, 「自国史と世界史」をめぐる国際対話-比較史・比較歴史教育研究会 30 年の軌跡-, V2 ソリューション発行, 星雲社発売, 2015, 全 190 (担当: 109-118)。

梅野正信, 中等諸学校生徒のアジア認識の生成と相克, 齊藤利彦編, 学校文化の史的探究, 東大出版会, 2015, 全 400 (担当: 331-356)。

梅野正信, 教育管理職のための法常識講座, 上越教育大学出版会, 2015, 全 405。

二谷貞夫, 東アジア市民教育の課題を前にして, 和井田清司他 4 名編著, 東アジアの学校教育, 三恵社刊, 2014, 全 400 (担当:

234-246)。

二谷貞夫, 中等社会科実践研究 - 21 世紀に生きる子どもたちを育てる -, 中等社会科実践研究会紀要編集委員会, Vol. 1 創刊号, 中等社会科実践研究会発行, 2014, 12, 全 176 (担当: 7-10, 69-76, 135-137)

蔡秋英, 中国の教科書と授業構想, 草原和博・渡部竜也編著, "国境・国土・領土"教育の論点争点: 過去に学び, 世界に学び, 未来を拓く社会科授業の新提案, 明治図書出版, 2014, 全 200 (担当: 98-105)。

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

国際理解の視点に立った東アジア交流史の社会科教材開発

<http://www.juen.ac.jp/kaken/24531177/index.html>

上越教育大学・学習臨床・梅野研究室ゼミの風景

<http://www.juen.ac.jp/lab/umeno/ume.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高 吉嬉 (KO, Kilhee)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号: 20344781

(2) 研究分担者

梅野 正信 (UMENO, Msanobu)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号: 50203584

(3) 研究分担者

國分 麻里 (KOKUBU, Mari)

筑波大学・人間系・准教授

研究者番号: 10566003

(4) 研究分担者

金 玟辰 (KIM, Hyunjin)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号: 10591860

(5) 研究協力者

蔡 秋英 (SAI, Shuei)

広島県立戸手高等学校

(6) 研究協力者

二谷 貞夫 (NITANI, Sadao)

上越教育大学名誉教授, 元日本社会科教育学会会長